

抑 留



アルバム「満州駐箆記念」より

〈提供 菊池正芳さん〉

生き残った

●天沼一丁目

石井 力

(大正七年生まれ)

身をもって体験した、戦争のほんの一端を記してみます。昭和二〇年八月九日突如としてのソ連軍の侵攻は、空襲によって始まった。当時私はハルピンの航空修理廠より国境に近い勃利に派遣されていた。

私たちは戦闘部隊でなく、飛行機の修理部隊なので、兵員一〇〇名に銃が一四挺、弾薬が七〇〇発という全く戦闘能力のない部隊であった。

一二日、急速最終列車が編成され、牡丹江經由ハルピンに転進することになった。牡丹江の手前樺林でこの列車は、ソ連軍と遭遇し戦闘となった。この様相は、生涯脳裡から消えない激戦であった。

開拓避難者も便乗した五五輛編成の長大な列車は、牡丹江の強行突破を計ったが、ソ連戦車の強力な火砲の集中砲撃に晒され、兵員、一般邦人、約二五〇〇名中約二〇〇〇名が死傷し、死体が累々と酸鼻を極めた。この間、一九時ごろより約四時間の戦闘であった。

この半日前、前線の若い幹部教育隊一六〇〇名が、ソ連軍

本隊の進行を阻止し、私たち友軍の撤退の活路を開き、文字通り人柱となり全滅した。戦後話題となった「岸壁の母」物語りの息子は、幹部教育隊の一員であった。

戦場離脱の翌朝から、ハルピンの本隊に向け、山中逃避の八日間、三七〇キロの強行軍が始まる。全滅を避けるため、途中より兵員を二隊にわけて行動する。王道河子の郊外で、一五機編隊の爆撃を受け、戦傷者一名が出る。

一六日、山中で他部隊の兵員より、信じられない終戦の報を聞く。強行軍八日間の、後半の二三日は、夢遊病者の歩きで、どうやって歩いたかは、体の衰弱からくる記憶喪失で思い出せない。やつと夜中に本隊にたどり着き、隊長に報告、安心して死者のように眠った。

翌日、早くも進軍して来たソ連軍により「武装解除」を受け、今度は東方に向け、元来た道を逆行しようとは、考えてもみないことで、ハルピンと牡丹江の間、往復一八日間約六五〇キロを歩いたのであった。

捕虜となり、一〇〇〇名単位で作業隊が編成され、一〇月

上旬ごろ、貨車に乗せられソ連領に入る。貨車の進路で、南下するか北上するかは議論の分かれたことであつたが、磯の香りがしてきて、興凱湖と判断。シベリア行きであることが決定づけられ、全員が落胆した。

五日間貨車は走り、雪降る中に降ろされる。今度は雪中行軍で夕方近く、帝政時代の廃屋と思われる名ばかりの収容所に着いた。北緯五〇度、東経一三二度の、テルマという寒村であつた。この地で、寒村を市街にするための、過酷な重労働が始まつた。

私たちの概念とは反対に、シベリアのツンドラ（湿地、凍土帯）は、極寒にすべての作業を可能にするのであつた。重労働の数々は紙面の都合で、多くを記せないので、過酷な作業のみ記してみます。

テルマ河より水道管を敷設する工事は、湿地が凍土となる極寒中だけに出来る作業で、凍土を深さ約三メートル、全長約四キロの穴を掘る大作業である。

朝作業前に整備されたつるはしが、昼には先端が丸くなり、役に立たなくなる。凍土は固く火花が出る。一日約二〇センチも掘れない。

気温は零下三〇度から四〇度での作業である。暖をとるにも、付近に枯木も見つからない。作業中は互いに凍傷にならぬように注意をし合う。この間、零下五〇度も体験する。

兵隊は、重労働と栄養失調で、日一日とやせ細り、皆骸骨の様相になって来る。課せられたノルマが厳しいので、正に

地獄の作業であつた。

いずれの作業も、日本人の器用さが発揮されるため、ソ連の監督も、二年目には、日本人にまかせられるようになった。

私は、昭和二三年の初め、遂に倒れて入院した。七五キロの体重が三八キロになり、歩行もままにならない状態になつた。約三か月の病院内の軽作業で、やや体力も回復した。

五月、頭上に北斗七星が廻っている。大きな北極星を眺め、白夜に故国を想う毎日であつた。

スターリンは、五〇万人の日本人捕虜を勝手に酷使して、第二シベリア鉄道を建設したのである。

樺林の戦闘、六五〇キロの行軍、シベリアの重労働を生き抜き、昭和一五年入営、引続き召集以来、想い続けた故国日本に、昭和二三年六月復員した。二等兵で入営以来、実に八年百余日目で、母親の膝元に還つたのである。

戦争は、非情、無惨である。二度とあつてはならないことである。平和の尊さを、切に思う。

終戦

●大田区大森本町二丁目
石垣 正樹

(大正一一年生まれ)

「警急電報」無線通信所から大きな声が届いた。スワ何事かと直ちに暗号翻訳の準備を整える。警急電報とは陸軍の通信文の中で最優先、最重要の電報で、この電報の翻訳は暗号係の将校が自ら作業しなければならない。間もなく赤い紙の貼られた電報通信紙が配達された。早速作業開始、電文全文の翻訳終了午前一一時四五分。

電文の内容は、本日正午よりラジオを通じて重大な発表がある。ので全員最寄の通信施設を利用して聴くように、という趣旨の師団司令部からの通報である。あと一五分しかない。取り敢えず上司に電話でその旨報告、指揮下の各部隊へ通報する。

当時私は、タイ国のドムアン飛行場(現ドムアン国際空港)に展開していた第一航空地区司令部の暗号係将校として勤務していた。司令部は、連合軍の進撃を予想してタイ国北部のジャングルの前線司令部を後退、ドムアン飛行場に展開していた。

正午、通信所の無線機をラジオの周波数に合わせて放送を

聞いた。しかし電波状況が悪くて、玉音放送も陸軍大臣の談話も聴きとれなかった。昭和二〇年八月一五日正午のことである。和戦いずれとも解し切れぬまま、翌日バンコック駐屯の地上部隊の最上級司令部である第七方面軍司令部に各部隊の長を集めた団隊長会同が開かれ、この席で終戦が伝達された。

混乱、動揺が全くなかったということではないが、内地へ復員上陸までは従来の軍の規律を維持することで、何とか大きな混乱はさけられた。数日後、南方総軍(軍司令官寺内元帥)と英国マウントバットン卿指揮の英印軍との降伏文書調印の軍使として参謀副長を長とする軍使一行が、真白に塗られた軍輸送機、軍使を表す緑の十字が書かれた飛行機でラングーンの連合軍へ往復。我々はドムアン空港で給油宿泊の任に当たった。

それから数日後、連合軍の先遣隊が飛行機で到着した。当時連合軍も本隊の大部隊はビルマ、タイ国境付近で、タイ国内には到達していなかった。

前代未聞の終戦で、何をどうしたらいいのか全く見当もつかない時期である。先遣隊の英軍旅団長が降り立った。広い飛行場の滑走路に机一つを挟んで彼我が向かい合った。英軍は開口一番「T参謀を出せ」と切り出した。「T参謀は自決した」やりとりが続いたが、結局自決していいことで打ち切り、「飛行場地区の日本軍部隊は四八時間以内に飛行場から退去せよ」となった。

T参謀とは大本営の作戦参謀T大佐で、インパール作戦に失敗、敗退する日本軍の撤退作戦の指導に、作戦を担当した。第七方面軍に大本営から派遣されていたが、数日前司令部の見習士官数名を引きつけて地下に潜入、逃亡していた。数年後、帰国し、参議院議員となり、ベトナム戦で再度現地潜入して消息を絶ったのは、御存知の人も多いと思いますが、同氏が著作した「潜行三千里」はここから始まっており、四八時間以内に飛行場に駐屯する数千人の部隊と、機材、兵器、食糧その他をいかにしてどこへ移動するか。戦時中ならばタイ国政府も便宜を与えてくれる、終戦後となれば一切の便宜は期待出来ない。窮余の一策でバンコック埠頭の倉庫群に着目、ウンもスンもない、ここへ数千名の日本軍を移した。そして武装解除、航空部隊は全て自動車を保有している。連合軍は空輸の先遣隊員がない。まず自動車は一台残らず没収された。そして着のみ着のままの実質的な捕虜生活が始まったのである。

無から有

捕虜生活も日を重ねて、日用品を始めとして一切の補給品はない。自分で持てる量だけしか身の回りの品物はない。それで我々航空関係部隊は、タイ国内の飛行場整備という連合軍命令で移動に移動をした。一番困ったのは紙である。司令部として命令を始め一般事務的に使う紙がなくなった。兵隊は便所用の紙もない。バナナの葉っぱを使うにしても、字を書くことは出来ない。「仕方がない、紙を作ろう」と考え、各部隊に回報を出して製紙に携わった経験者を集めた。多数の人がいれば各種の職業にいた人もおり、経験者はかなりの数が集まった。それぞれ専門部門に分かれて製紙工場作りが始まった。全て何もない中からのスタートである。人の知恵の素晴らしさをつくづくと体験した。山から弁当持ちで原料となるミツマタ風の本を探し出して集めることから始め、ついに紙らしき物を作り出した。しかし漂白するための薬品は一切ない。今流行の無添加の製品である。丈夫さはこの上ない。なかなか破れない丈夫さだが色が黒っぽい。謄写版印刷で何とか字が読める程度である。しかしないよりは良い。大成功である。人間の力、否日本人の偉大さに、作り上げた喜びは大変なものであった。まだその他に色々作り出したものはあるが、紙面に限りがあるため、紙作りだけを紹介した。間もなくまた八月一五日が巡ってくる。

半世紀前の想いを語る

● 荻窪二丁目

齋須 正治

(大正九年生まれ)

青春時代は鉄かぶと、二一歳にして満州国黒河省国境守備隊に勤務。川を境にして対岸ソビエト国ブラゴイチキンス街陣地。守備部隊に五年数か月の歳月が過ぎていった。除隊真近と思われたころにきた除隊延期通告には、本当に残念無念。春の雪どけとともに待ちに待った時だけに、あきらめなければならなかった運命。

駐屯地部隊での体験。昭和一七年一二月末ごろと思う。この年は氷点下三〇余度と記憶している。月曜日、各班ごとに入浴日。時刻は七時ごろ。浴場に行っておどろいた。湯気が天井より落ちた。そこには針の山ならぬ氷の粒々。たこ足に似た氷のかたまり。湯に入ってから出て来て、水滴のかたまりの上で衣服を着た。足がすい付いたことに驚いた。夏の入浴は三日に一回。各隊交代で、冬期は週一回。水源地からの送水が少ない。第二の体験。警備立哨中の時。処は黒龍江下流ゼーヤ川の合流点川幅一五〇〇メートルの地点に小島があり、その島の広さは一〇〇平方メートルくらいだと思う。守備部隊全員が中国軍の服を着装し、各人が小銃一丁を渡される。砲

塔（小黒河陣地）の夜間歩哨中、川の氷が割れる。その音が鉄砲をうつ時の音と寸分変わらない。無気味なかんじだ。氷が割れて流れ出す時に氷と氷がぶつかる音もすごい音だが、割れる音よりひびきは少ない。

次の体験。昭和一九年八月より一〇月中ごろまでの間、駐屯地部隊より西へ二里先の各中隊より古年兵を集め、小隊を作って炭焼隊を編成した。半数の者は未経験。私も未経験である。三人程が親の炭焼きの手伝いをしたとかで、馴れた作業者だった。炭を焼く材料はくぬ木で、たくさん自生してた。木炭は主に営外官舎と家族官舎で使用された。また、一部は部隊長室、各兵舎の湯沸しに利用。ひと釜三〇俵位焼き上がった。一〇〇俵位に焼け上ると、部隊から取りに来る。また、その時点で一〇人分の食糧が運ばれて来る。衣服は中国服を身に付けている。後日知った事だが、対岸よりスパイの者が渡って来るので、その防止と情況監視も目的にあった。

帰隊後、戦時計画により翌年春より本隊は後方へと下がりはじめ、結果的には編成外部隊と変じて行く。最後はハルピ

ン市街一角で終戦を迎え、武器を捨て、軍命にて牡丹江市外
附近海林弾薬庫近くに集結に至る。時に八月二〇日ごろと思
う。二か月位滞在したと記憶にある。

霜降りる一〇月初め移動開始。日本の土を踏めると思った
ところ、私達を乗せた汽車はシベリア奥地へと向かっていた。
着いた場所はバイカル湖西側ダイセット駅より一二四キロ奥
地の収容所で、そこで抑留。復員するまで約四年間新設鉄道
作業に明け暮れた。

一六八キロ奥地の収容所に移動した時の冬、鉄道作業も完
成に近いそんな時に汽車給水。給水塔勤務の際の体験。シベ
リア収容所における給水作業は午前九時より午後五時まで。
枕木・レールその他資材運搬車の給水作業で夜間は給水なし。
この地点は冷下四〇度から五〇度にまで温度が下がる。給水
のため水だしホースの差口を手でふさぎ、流れ出る時に手を
はなすと、水切れはよいが、要領次第ではホース中間に水分
がたまとすぐ凍りついて氷を割らぬと使用出来なくなる。
こんな時にホースの中を柳の木で突くと、ふしぎと氷が割れ
て出て来た。

ここまでに至る間、苦勞した四度の体験でした。飢えと寒
さで多くの仲間が、望郷の念を胸に、石にかじり付いてもと
う言葉を残して昇天した。悲惨な戦争は二度と繰り返して
はならないと特に誓います。



〈提供 尾形義三郎さん〉